

## 家事分担に関する研究（2）

—— 妻の家庭外就業による決定権と家事分担の変化 ——

坂田 桐子・黒川 正流

広島大学総合科学部人間行動研究講座  
(1989年10月31日受理)

### How husbands and wives share things to do (2)

—— Changes of power relations due to wife's getting employed ——

Kiriko SAKATA and Masaru KUROKAWA

#### Abstract

This study examined (a) the changes of power relations between husbands and wives and (b) the divisions of their domestic duties due to wives' getting employed. The subjects in this survey were 223 saleswomen of an insurance company who started their work after the marriage. They answered the ways how husbands and wives make their divisions as to the 14 domestic decisions and the ways 15 domestic duties being allocated before and after wives' employment. Being employed wives became to make more domestic decisions and took less part in the domestic duties than before. Those wives who had a higher financial contribution to their home budget had greater decision power and took part in more such kinds of domestic duties as were rated husbands' or cooperative jobs. Decision power and the allocation of domestic duties correlated neither with the reasons of starting work nor with the time of employment by the day.

As to the power relations between husbands and wives, those wives who showed wife dominance pattern tended to allocate more domestic duties to the husbands than those who showed the other three patterns; autonomic, syncretic and husband dominance.

本研究は、女性の家庭外就業が、夫妻間の勢力関係と家事遂行上の役割分担に及ぼす影響を検討するものである。

現在、我が国における既婚女性の家庭外就業率は51%にのぼっており、今後も増加する傾向にある（昭和63年版婦人労働白書）。家庭外で働く既婚女性の増加は、最近の女性の生き方を示す大きな特徴の一つであり、従来の「男は仕事、女は家庭」式の伝統的性役割観は崩れつつあると思われる。それでは、社会におけるこのような傾向は、家庭の仕事に関する性役割分担にどのような影響を及ぼしているのであろうか。

結婚後の女性の家庭外就業は、家庭における夫妻の役割分担や勢力関係を変化させるものと思われる。黒川・坂田（1988）は、一般的性役割態度、年齢、結婚生活年数、子供の有無、妻の就労状況のうち、家庭の仕事の実行度に最も強く関連しているのは、妻の就労状況であり、妻が定職を持つ場合の方が家事専業の場合よりも、夫の家事分担度が大きいことを確認している。Wolfe（1959）は、家庭内の事柄に関する決定権を勢力の指標と考え、妻の家庭外就業が家庭内における妻の勢力を増大させることを示唆している。夫妻間の勢力関係に関するわが国

の研究は、小川 (1971)、伊藤 (1986) らによって数多く行なわれているが、妻の家庭外就業による勢力関係や役割構造の変化に特に焦点を当てた研究は少ない。また、妻の就業に伴うどのような要因が勢力関係を変化させるのか、という問題も明らかになっていない。そこで本研究では、妻が就業する前後の夫妻間の勢力関係と役割分担の変化に焦点を当て、就業に含まれる他の様々な要因との関係も併せて検討する。また、夫妻間の勢力関係と役割分担との関連についても考察を加えることにする。

従来の研究結果から考えると、就業前よりも後の方が、妻の勢力が大きいであろう。また役割分担については、就業によって妻の実行度が減少し、夫の実行度が増大するであろう。今回の研究では、就業に含まれる要因として、妻の収入が家計に占める割合・一日当たりの就業時間・就業の理由に焦点を当てる。家計を賄うことが家庭内での勢力を増大させると考えるならば、収入の割合が多いほど勢力が大きくなるはずである。また、家事に割く時間の減少が妻の家事実行度を減少させるとすれば、就労時間が長くなるほど妻の家事実行度が少ないはずである。就業の理由については、経済的な理由による就業（生活を支えるため）と、個人的な希望による就業（自分の能力を活かすため・他人との交流を深めるため、など）とで結果が異なると思われる。すなわち、前者では妻の勢力が増大すると考えられるが、後者では増大するとは限らないであろう。さらに、家庭内の勢力構造と役割分担には、これら妻の就労に伴う諸要因のみでなく、性役割態度などの個人特性が影響するであろうことは、黒川・坂田 (1988) が示唆している。男女平等意識が強いほど妻の勢力は増大し、家事実行度は低下するであろう。

勢力関係と役割分担との関連については、これまで明確な知見は見当たらない。本研究では、この点についても検討する。

## 方 法

**調査対象** 広島県内に支店のある某保険会社の女性外交員309名。このうち、現在の仕事を結婚後に始めており、夫と同居して家庭内の主婦の立場にある回答者223名について以下の分析を行なった。

**実施期間** 1989年1月

**調査方法** 保険外交員を対象に行なわれた講演会出席者に質問紙を配布し、その場で回答させた後、回収した。

**質問紙** 「家事分担についてのアンケート」。質問紙の構成は以下の通りである。

①フェイスシート：年齢・同居家族構成・結婚生活年数・夫との年齢差・仕事開始時（結婚前・結婚後）。②現在の夫妻間の勢力関係の測定：Wolfe (1959)・伊藤 (1986) の方法に従い、家庭における決定事項14項目を取り上げて勢力関係の測定項目とした。各項目について、決定権が夫・妻のどちらにあるかを、夫の意見が絶対的 (1)―妻の意見が絶対的 (5) の5段階尺度で評定させた。③現在の夫妻間の役割分担の測定：黒川・坂田 (1988) で用いられた家庭の仕事41項目から、一般的家事雑用8項目、家庭外との対応7項目を取り上げた。各項目について、夫・妻のどちらが実行しているかを、夫がする (-3)―妻がする (+3) の7段階尺度で評定させた。④決定事項の重要度：前述の決定事項14項目について、それぞれどの程度重要であると思うかを、非常に大切である (1)―全く大切ではない (5) の5段階尺度で評定させた。⑤一般的性役割態度測定：Attitude Toward Women Scale (Spence et al., 1978) の日本語版15項目を用いた。この尺度は女性の役割や権利に対する考え方を表わした記述に対して、全く賛成―全く反対の4段階尺度で回答させるものであり、高得点であるほど男女の平等観が強い対等的態度、

低得点ほど伝統的な性役割を重んじる伝統的態度であると判断される。前者の態度をここでは便宜的に非伝統的態度と称する。⑥仕事に関する質問項目：現在の仕事以外の家庭外就業経験の有無・就業の理由・一日の就業時間・妻の収入が家計に占める割合・仕事にやりがいを感じた時・仕事にやる気をなくした時、の計6項目。⑦就業前の夫妻間の勢力関係の測定：②で述べた家庭における決定事項14項目について、就業前には決定権が夫・妻のどちらにあったかを思い出して回答させた。⑧就業前の夫妻間の役割分担の測定：③に述べた家庭の仕事14項目について、就業前には夫・妻のどちらが実行していたかを思い出して回答させた。

## 結 果

①就業による勢力関係の変化：まず、決定事項14項目それぞれについて、就業前の平均値と現在の平均値の差を検定した (t 検定)。また、各項目の重要度について、平均値と標準偏差を算出した。結果をそれぞれ Table 1-a., Table 1-b. に示す。現在の決定権のうち、平均値が 3.5 以上の項目を妻の決定領域、2.5 以下の項目を夫の決定領域、その間を共通領域とすると、「5. 妻が使う小遣いの金額」「9. 一ヶ月の生活費」「7. 貯蓄の金額と方法」「10. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の金額」の4項目が妻の決定領域、「6. テレビのチャンネル」「1. どんな車を買うか」の2項目が夫の決定領域、残りの項目が共通領域となる。この結果を重要度の結果と対比すると、重要度の上位5項目はすべて共通領域に含まれており、重要だと認知されている事柄は夫と妻が共同で決定していると考えられる。就業前と現在を比較してみると、全体的に就業前よりも現在の方が平均値が高く、決定権が妻の側に寄ったと考えられる。しかも有意差のあった項目の中には、「2. どんな家を買う (借りる) か決める」「11. 財産の売買」など、重要度が高い項目や、共通領域に属する項目も含まれる。このことから、就業によって妻の決定権が増大したと考えられる。

Table 1-a. 決定権の現在と就業前の比較 (t 検定)

項 目	現 在 mean (SD)	就 業 前 mean (SD)	
妻	5. 妻が使う小遣いの金額	4.25 (0.92)	3.83 (0.99) ***
	9. 一ヶ月の生活費	4.12 (0.95)	3.66 (0.99) ***
	7. 貯蓄の金額と方法	3.94 (1.05)	3.63 (1.04) ***
	10. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の金額	3.60 (0.98)	3.46 (1.01)
共 通	13. 子供のしつけ	3.30 (0.94)	3.31 (0.94)
	3. どんな大型家電製品を買うか	3.25 (1.01)	3.07 (1.00) **
	12. 子供の進学, あるいは就職	3.06 (0.72)	2.89 (0.81) **
	14. 家族連れの日休みのレクリエーション	2.91 (0.97)	2.95 (0.93)
	2. どんな家を買う (借りる) か	2.86 (0.89)	2.56 (1.04) ***
	4. 夫が使う小遣いの金額	2.85 (1.24)	2.80 (1.12)
	8. 知人からの借金の依頼をどうするか	2.77 (1.15)	2.59 (1.05) **
夫	11. 財産の売買	2.52 (0.96)	2.32 (0.95) ***
	6. テレビのチャンネル	2.30 (0.97)	2.36 (0.91)
	1. どんな車を買うか	2.06 (0.92)	2.05 (0.92)

「夫の意見が絶対的 (1)」-「妻の意見が絶対的 (5)」 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

Table 1-b. 決定項目の重要さ

項 目	mean (SD)
2. どんな家を買う (借りる) か	1.40(0.69)
11. 財産の売買	1.41(0.80)
12. 子供の進学, あるいは就職	1.54(0.70)
13. 子供のしつけ	1.71(0.74)
8. 知人からの借金の依頼をどうするか	1.87(1.09)
9. 一ヶ月の生活費	2.36(0.99)
1. どんな車を買うか	2.61(1.02)
7. 貯蓄の金額と方法	2.62(1.02)
3. どんな大型家電製品を買うか	2.76(0.87)
10. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の金額	2.85(0.86)
4. 夫が使う小遣いの金額	2.98(0.94)
14. 家族連れの日休みのレクリエーション	3.08(0.88)
5. 妻が使う小遣いの金額	3.52(0.99)
6. テレビのチャンネル	4.23(0.79)

「大変重要 (1)」-「全く重要でない (5)」

Table 1-c. 就業前と現在の勢力類型

現在 就業前	現在				計
	夫優位型	妻優位型	自律型	協調型	
夫優位型	33.3	6.1	45.5	15.2	16.5
妻優位型	0.0	82.4	17.6	0.0	8.5
自律型	3.5	11.8	74.1	10.6	42.5
協調型	4.6	1.5	24.6	69.2	32.5
計	8.5	13.5	48.5	29.5	%

次に, Wolfe (1959) の方法に従って, 夫妻の現在と就業前の勢力関係を次の4類型に分類した。妻よりも夫の権威の方が大きい夫優位型, 夫よりも妻の権威の方が大きい妻優位型, 夫と妻の相対的権威はほとんど等しく, しかも権威を共有する範囲が大きい協調型, 夫と妻の相対的権威は殆ど等しいが, 権威を共有する範囲が小さい自律型, である。14項目の合計値が33以下のものを夫優位型, 51以上のものを妻優位型とし, 合計値が34~50のものうち「3. どちらの意見も平等」の項目数が0~6のものを自律型, 7~14のものを協調型とした。その結果, 就業前の勢力関係は, 夫優位型と分類されたもの16.5%, 妻優位型8.5%, 自律型42.5%, 協調型32.5%となった。妻優位型は最も少なく, 自律型が最も多い。一方, 現在の勢力関係は, 夫優位型8.5%, 妻優位型13.5%, 自律型48.5%, 協調型29.5%となった。就業前と比較すると, 夫優位型と協調型が減少し, 妻優位型と自律型が増加している。Table 1-c. は妻の就業による勢力類型の変化を示している。妻優位型・自律型・協調型の大部分は妻の就業後も変化していないが, 夫優位型ではその2/3が他の類型に変化している。このことから, 妻の就業によって, 夫の勢力が減少したと考えられる。

②就業による役割分担の変化: まず, 家庭の仕事15項目それぞれについて, 就業前の平均値と現在の平均値の差を検定した (t 検定)。結果を Table 2. に示す。現在の役割分担について, 平均値が +1.0 以上の項目を妻の役割領域, -1.0 以下の項目を夫の役割領域, その間の項目を共通領域とすると, 炊事・洗濯などの家事雑用を始めとする10項目が妻の役割領域に含まれ,

Table 2. 家庭の仕事に対する役割分担 現在と就業前の比較 (t 検定)

項 目		現 在 mean (SD)	就業前 mean (SD)
妻 領 域	4. 学校行事・PTA に参加する	2.67 (0.72)	2.79 (0.65) **
	2. 炊事をする	2.65 (0.76)	2.88 (0.43) ***
	1. 洗濯をする, 洗濯物をたたむ	2.63 (0.85)	2.86 (0.45) ***
	3. 食器を洗う	2.61 (0.79)	2.88 (0.41) ***
	5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする	2.06 (1.40)	2.28 (1.34) **
	10. 町内の会合に出る	1.83 (1.61)	1.89 (1.65)
	7. 家のお客に対応する	1.43 (1.43)	1.71 (1.47) **
	14. 税金の申告, 役所の手続きなどをする	1.33 (2.12)	1.41 (2.17)
共 通	6. 夫の衣服の買い物	1.17 (1.87)	1.35 (1.85) *
	8. 部屋の中の家具の位置をかえる	1.17 (1.66)	1.24 (1.69)
夫 領 域	9. 夫の親との対応をする	0.88 (1.52)	1.15 (1.61) **
	12. きれいな電球を取り替える	-0.75 (2.21)	-0.52 (2.38) *
	11. こわれた電気製品の修理をする	-1.38 (1.90)	-1.36 (2.00)
共 通	13. 車の運転をする	-1.67 (1.82)	-1.96 (1.77) **
	15. 結婚式や葬式の時家族を代表する	-1.76 (1.71)	-1.45 (2.02) **

「夫がする (-3)」「妻がする (+3)」 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

家庭の仕事はほとんど妻が行なっていることが伺われる。現在の平均値を就業前のそれと比較した t 検定の結果をみると、10項目について、平均値が就業前よりも低くなっている。この傾向は、特に妻領域の上位5項目について顕著であり、夫の家事雑用への参加が増加したと考えられる。逆に就業前よりも平均値が大きくなっている項目は「13. 車の運転をする」であり、これは保険外交員という仕事の性質上、自分で車を運転する機会が増加したためであろうと思われる。

③本研究のサンプル特性の吟味：今回の分析は同一企業に属する保険外交員を対象としている。この職業に見られる家事役割分担の特色を吟味するために、専業主婦を含む一般の既婚女性を対象とした1988年の黒川・坂田の報告（以下、第1報という）の結果と今回の結果を対比した。最初に、保険外交員の現在の役割分担と、第1報の就業既婚女性一般147名（アルバイト・パートを含む）の役割分担を比較した（Table 3.）。家庭の仕事15項目について t 検定を行なったところ、8項目について有意差が認められ、保険外交員の方が就業既婚者一般よりも平均値が高くなっていた。これらのうち、「8. 部屋の中の家具の位置を変える」「11. 壊れた電気製品の修理をする」を除く6項目はすべて家庭外との対応行動に関する項目である。保険外交員は就業既婚者一般よりも、家庭外との対応、すなわち外交的行動をより多く行なっているようである。次に、就業による差を吟味するために、第1報の家事専業者だけ（86名）を保険外交員と比較した（Table 3.）。t 検定の結果、8項目で有意差が見られた。一般的な家事雑用である「3. 食器を洗う」「1. 洗濯をする, 洗濯ものをたたむ」「12. きれいな電球を取り替える」の3項目については家事専業者の方が保険外交員よりも多く実行している。しかし家庭外との対応に関する4項目を含む他の5項目については、すべて保険外交員の方が家事専業者よりも多く実行していた。第1報の結果において、定職についている既婚女性は家事専業者よりも家庭の仕事全般にわたって実行度が低かったことと比べると、保険外交員は家庭外で就業しているにもかかわらず家庭の仕事を多く行なっているようである。保険外交員という職種が比較

Table 3. 家庭の仕事に対する役割分担 保険外交員と就業既婚女性・保険外交員と家事専門者の比較 (t検定)

項目 (n)	保険外交員 (223) mean (SD)	就業既婚女性 (147) mean (SD)	家事専門家 (86) mean (SD)
妻 4. 学校行事・PTA に参加する	2.67(0.72)	2.13(1.15) ***	2.12(1.29) ***
2. 炊事をする	2.65(0.76)	2.61(0.84)	2.79(0.55) <sup>a</sup>
妻 1. 洗濯をする, 洗濯物をたたむ	2.63(0.85)	2.66(0.86) <sup>a</sup>	2.87(0.50)***
3. 食器を洗う	2.61(0.79)	2.56(0.95)	2.85(0.51)***
領 5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする	2.06(1.40)	1.27(1.52) ***	1.47(1.63) **
10. 町内の会合に出る	1.83(1.61)	0.91(1.88) ***	1.01(1.93) **
7. 家のお客に対応する	1.43(1.43)	1.08(1.50) *	1.23(1.61)
域 14. 税金の申告, 役所の手続きなどをする	1.33(2.12)	-0.21(2.37) ***	-0.59(2.39) ***
6. 夫の衣服の買い物	1.17(1.87)	1.05(1.84)	1.28(1.81) <sup>a</sup>
8. 部屋の中の家具の位置をかえる	1.17(1.66)	0.37(1.91) ***	-0.12(2.20) ***
共通 9. 夫の親との対応をする	0.88(1.52)	0.43(1.56) *	0.57(1.54)
12. きれいな電球を取り替える	-0.75(2.21)	-0.90(2.05)	-0.12(2.20) <sup>a</sup> *
夫 11. こわれた電気製品の修理をする	-1.38(1.90)	-1.83(1.60) *	-1.58(1.97)
領 13. 車の運転をする	-1.67(1.82)	-1.82(1.54)	-1.87(1.52)
域 15. 結婚式や葬式の時家族を代表する	-1.76(1.71)	-1.77(1.65)	-1.44(1.90) <sup>a</sup>

<sup>a</sup> 保険外交員の方が平均値が低いことを示す。

「夫がする (-3)」-「妻がする (+3)」 \* p<.05 \*\* p<.01 \*\*\* p<.001

的時間に融通のきくパートのな性格を持ったものであることを考えると、この傾向は就業形態や職種による特徴であるとも考えられる。

以下、就業に関する諸要因と、現在の勢力関係・役割分担との関連を検討する。

④妻の収入の割合との関連：妻の収入が家計に占める割合は、「2割以下」と答えたもの26.8%、「2割から5割」48.8%、「5割から8割」19.6%、「ほぼ全部」4.8%であった。妻の収入の割合と、現在の勢力関係・役割分担との関連を検討するために、妻の収入の割合を独立変数、決定事項14項目と家庭の仕事15項目を従属変数としてクロス分析およびカイ自乗検定を行なった。なお、決定事項については「夫の意見が絶対的・夫の方が強い」を『夫が決定する』、「どちらの意見も対等」を『対等に決定する』、「妻の意見が絶対的・妻の方が強い」を『妻が決定する』と分類し、役割分担については「夫がする・おおむね夫・どちらかといえば夫」を『夫がする』、「どちらも平等にする」を『平等にする』、「妻がする・おおむね妻・どちらかといえば妻」を『妻がする』と分類しなおして以下の分析を行なった。決定項目についてのカイ自乗検定の結果を Table 4-a. に示す。車・家・大型家電製品の購入・知人からの借金  
の依頼・財産の売買・子供の進学や就職・テレビのチャンネル・休日のレクリエーションの8項目で、妻の収入が多いほど妻の決定権が大きくなっており、夫の決定権と対等な決定権は妻の収入が家計のほぼ全部を占める場合に最も少なかった。大型家電製品の購入と財産の売買について、Fig. 4-a. に示す。このうち、「12. 子供の進学や就職の決定」については、妻の収入が多い方が対等な決定が少ない。「4. 夫が使う小遣いの金額」と、「10. 進物品や慶弔の金額」については、妻の収入が家計のほぼ全部を占める場合の方が、他の場合に比べて妻の決定が大きい。全体的に見ると、いずれの項目についても、妻の収入の割合が家計のほぼ全部を占める

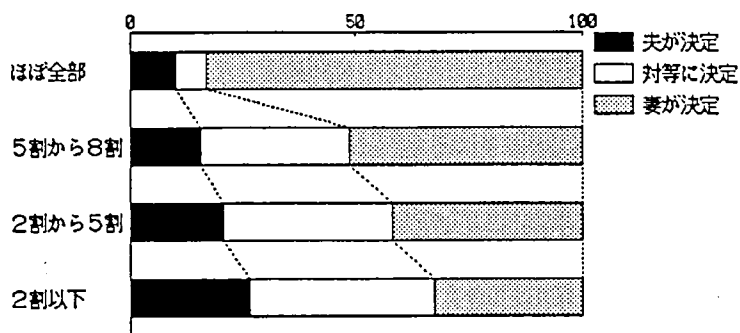
Table 4-a. 妻の収入の割合と決定項目との関連 (カイ自乗検定)

項 目	妻の収入の割合		
	妻が決定	対等に決定	夫が決定
妻 5. 妻が使う小遣いの金額 9. 一ヶ月の生活費 7. 貯蓄の金額と方法 10. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の金額	A>BCD	AB<CD	
共 13. 子供のしつけ 3. どんな大型家電製品を買うか 12. 子供の進学, あるいは就職 14. 家族連れの日休みのレクリエーション 2. どんな家を買う (借りる) か 4. 夫が使う小遣いの金額	A>BCD A>BC>D A>B>CD A>BC>D A>BC>D A>BCD	A<BCD A<BCD AB<CD A<BCD A<BCD A<BCD	
通 8. 知人からの借金の依頼をどうするか 11. 財産の売買	A>B>CD A>B>C>D	A<BCD A<BCD	A<CD A<BCD
夫 6. テレビのチャンネル 1. どんな車を買うか	A>B>CD A>BC>D	A<D	A<BCD A<BCD

「夫の意見が絶対的 (1)」-「妻の意見が絶対的 (5)」

妻の収入の割合 A ほぼ全部 B 5~8割 C 2~5割 D 2割以下

どんな大型家電製品を買うか決める



財産の売買を決める

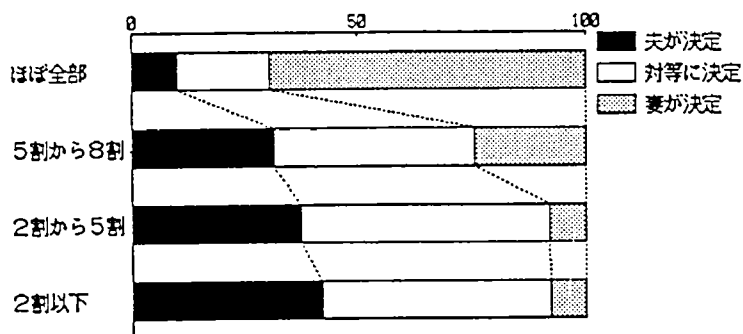


Fig. 4-a. 妻の収入の割合と決定権

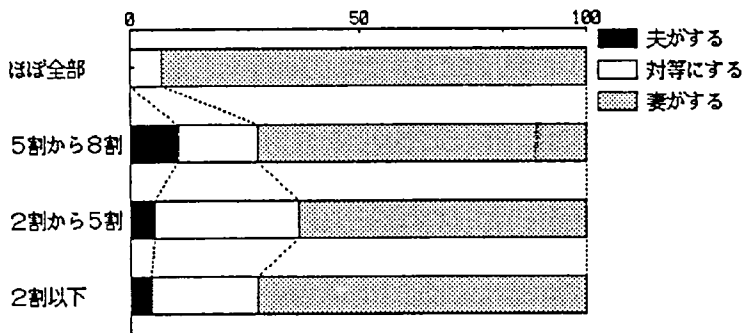
Table 4-b. 妻の収入の割合と役割分担との関連 (カイ自乗検定)

項 目	妻の収入の割合			
	妻がする	対等にする	夫がする	
妻 領 域	4. 学校行事・PTAに参加する			
	2. 炊事をする			
	1. 洗濯をする, 洗濯物をたたむ			
	3. 食器を洗う			
	5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする			
	10. 町内の会合に出る	A>BCD	A<C	
	7. 家のお客に対応する	A>BCD	A<BCD	
	14. 税金の申告, 役所の手続きなどをする			
	6. 夫の衣服の買物	A>CD	A<BCD	
共 通	8. 部屋の中の家具の位置をかえる	A>BCD	A<BCD	
	9. 夫の親との対応をする	A>B>CD	AB<CD	
	12. きれいな電球を取り替える	A>BCD	A<BC	A<CD
夫 領 域	11. こわれた電気製品の修理をする	A>BC>D		AB<CD
	13. 車の運転をする	A>B>CD		A<BCD
	15. 結婚式や葬式の時家族を代表する	A>B>CD	A<B	A<B<CD

「夫がする (-3)」-「妻がする (+3)」

妻の収入の割合 A ほぼ全部 B 5~8割 C 2~5割 D 2割以下

町内の会合に出る



壊れた電気製品の修理をする

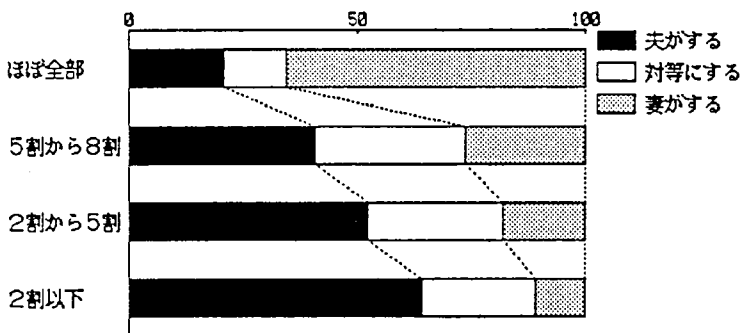


Fig. 4-b. 妻の収入の割合と役割実行度



場合に妻の決定が50%以上を占めており、他の場合よりも大きい。妻の収入の割合が大きくなるほど妻の決定権も大きくなるようである。

役割分担についてのカイ自乗検定の結果を Table 4-b. に示す。夫領域の3項目と共通領域の「9. 夫の親との対応」で、妻の収入が大きいほど妻の実行度が大きく、逆に夫の実行度は少なくなるという傾向が見られた。特に、妻の収入が家計のほぼ全部を占める場合には、いずれも妻の実行が50%を超えている。また、「10. 町内の会合に出る」「6. 夫の衣服の買い物」など5項目についても、「ほぼ全部」は他の場合に比べて妻が多く行なっている。「10. 町内の会合に出る」「11. 壊れた電気製品の修理をする」について Fig. 4-b. に示す。以上のことから、妻の収入の割合が大きくなるほど妻の役割実行度、とりわけ共通・夫領域の役割実行度が増大すると考えられる。

⑤就業の理由および就業時間との関連：就業の理由は、「生活を支えるため」が最も多く40.3%、「社会や他人との交流のため」27.2%、「小遣いを稼ぐため」9.9%、「自分の能力を活かすため」9.9%「その他」12.7%となっている。就業の理由を独立変数としてクロス分析およびカイ自乗検定を行なったが、勢力関係・役割分担とも関連は認められなかった。

一日平均の就業時間については、2～5時間(22.1%)、6～8時間(60.8%)、9～12時間(17.1%)に分類して同様の分析を行なったところ、「7. 家のお客に対応する」について、就業時間が長いほど対等にする割合が大きく、妻がする割合が小さい傾向が見られた。しかし1項目でしか有意差が認められなかったことから、就業時間の長さという要因の影響を受けるような家庭内の仕事は限られると思われる。

⑥その他の要因との関連：妻の年齢・結婚生活年数・一般的性役割態度を独立変数として同様の分析を行なった。まず、妻の年齢を20才代(7.9%)、30才代(38.6%)、40才代(30.7%)、50才代(13.6%)、60才代以上(9.3%)に分類して分析を行なったところ、幾つかの項目で有意差が得られた(Table 6-a., 6-b.)。決定事項である「12. 子供の進学,あるいは就職」「14. 家族連れの休日のレクリエーション」および家庭の仕事である「7. 家のお客に対応する」「9. 夫の親との対応をする」で、20才代以下では対等な実行・決定が多く、60才代以上では妻の実行・決定が多いという傾向が見られた。また、決定事項5項目と夫領域の仕事3項目については、他の年代よりも60才代以上で妻の実行・決定が多くなっている(「3. どんな大型家電製品を買うか決める」「11. 財産の売買」「11. 壊れた電気製品の修理をする」について Fig. 6-a. に示す)。この傾向は、年代による価値感の相違を表わしていると思われる。

結婚生活年数については、10年未満(23.9%)、11～20年(42.3%)、21～30年(23.4%)、31年以上(10.4%)に分類して分析を行なった。その結果、「3. どんな大型家電製品を買うか決める」では、「31年以上」が他の場合よりも妻の決定が多く、対等な決定が少ない(Fig. 6-b.)。「4. 夫が使う小遣いの金額を決める」では「10年未満」で他の場合よりも妻の決定が少なく、夫の決定が多い。このような項目については結婚生活年数が多くなるほど妻の決定権が強くなると思われる。一方、家庭外との対応行動である「5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする」「10. 町内の会合に出る」では、「11～20年」で他の場合よりも妻が多く行なっており、対等な実行が少ない(Fig. 6-b.)。結婚後11～20年頃は、妻が積極的に家庭の外へ出ていきやすい時期であるとも考えられる。ライフサイクル的見地からの検討も必要であろう。

性役割態度については、まず各個人ごとに性役割態度得点を算出したところ、得点分布は12～38であり(レンジ0～45)、平均値25.2、標準偏差4.93となった。そこで25点以下と26点以上で2群に分け、前者を伝統型、後者を非伝統型としてクロス分析を行なった。「4. 学校行事やPTAに参加する」については、伝統型よりも非伝統型の方が妻の実行が多く、対等な実

Table 6-a. 年齢・結婚生活年数・性役割態度と決定項目との関連 (カイ白乗検定)

項 目	年 齢		結 婚 生 活 年 数		性 役 割 態 度	
	妻が決定	対等に決定	妻が決定	夫が決定	妻が決定	夫が決定
5. 妻が使う小遣いの金額						
9. 一ヶ月の生活費						
7. 貯蓄の金額と方法						
10. 親類への中元・歳暮の進物品や慶弔の金額						
13. 子供のしつけ						
共 3. どんな大型家電製品を買うか	ABCD<E	BCD>E	ABC<D	ABC>D		
12. 子供の進学、あるいは就職	A<BC<E	AB>CD>E		A>D		
14. 家族連れの休日のレクリエーション	A<BC<E					
2. どんな家を買う (借りる) か	ABC<DE	A>E	A<CD	A>BCD		
4. 夫が使う小遣いの金額						
8. 知人からの借金の依頼をどうするか						
11. 財産の売買	ABCD<E	A>BCD>E				
夫 6. テレビのチャンネル	ABC<E	A>CDE	BC>DE			
1. どんな車を買うか	ABC<E	A>CDE	BC>E			B>A B<A

「夫の意見が絶対的 (1)」-「妻の意見が絶対的 (5)」

年齢 A 20才代以下 B 30才代 C 40才代 D 50才代 E 60才代以上

結婚生活年数 A 10年以下 B 11年~20年 C 21年~30年 D 31年以上

性役割態度 A 伝統型 B 非伝統型

Table 6-b. 年齢・結婚生活年数・性役割態度と役割分担との関連 (カイ自乗検定)

項 目	年 齢		結 婚 生 活 年 数		性 役 割 態 度	
	妻がする	夫がする 対等にする	妻がする	夫がする 対等にする	妻がする	夫がする 対等にする
4. 学校行事・PTAに参加する						
2. 炊事をする					B>A	B<A
妻 1. 洗濯をする, 洗濯物をたたむ						
3. 食器を洗う						
5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする			B>AC>D	B<AC		
領 10. 町内の会合に出る			B>ACD	B<A		
7. 家のお客に対応する	A<BCDE	A>BCDE				
域 14. 税金の申告, 役所の手続きなどを 6. 夫の衣服の買い物 8. 部屋の中の家具の位置をかえる						
9. 夫の親との対応をする	A<BCDE	A>BCD>E				
通 12. された電球を取り替える						
夫 11. こわれた電気製品の修理をする	AB<E	A>E			B>A	B<A
領 13. 車の運転をする	ABCD<E	A>BCDE			B>A	B<A
域 15. 結婚式や葬式の時家族を代表する	ABC<E	ABC>E				

「夫がする (-3)」-「妻がする (+3)」

年齢 A 20才以下 B 30才代 C 40才代 D 50才代 E 60才代以上

結婚生活年数

A 10年以下 B 11年~20年 C 21年~30年 D 31年以上

性役割態度 A 伝統型 B 非伝統型

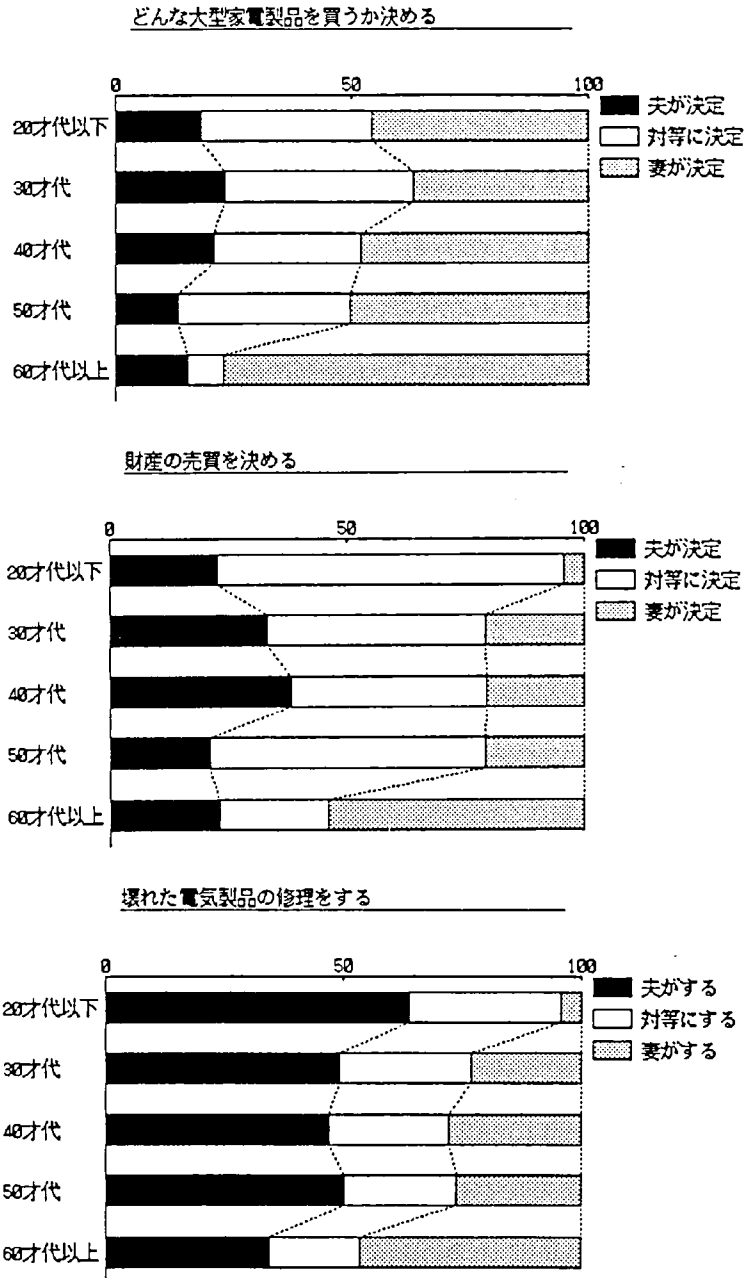


Fig. 6-a. 年齢と決定権および役割実行度

行が少ない。また、「11. 財産の売買を決める」「11. 壊れた電気製品の修理をする」「13. 車の運転をする」の3項目について、伝統型よりも非伝統型の方が対等な決定・実行が多く、夫の決定・実行が少なくなっていた（前者2項目について Fig. 6-c. に示す）。財産の売買の決定は共通領域の中で最も夫領域に近く、他の2項目はどちらも夫領域の仕事である。異性の領域（この場合は夫領域）の実行度に性役割態度が関連しており、非伝統型には対等な実行が多いという結果は、第1報で得られた知見と一致している。しかし決定事項の中で有意差の見られ

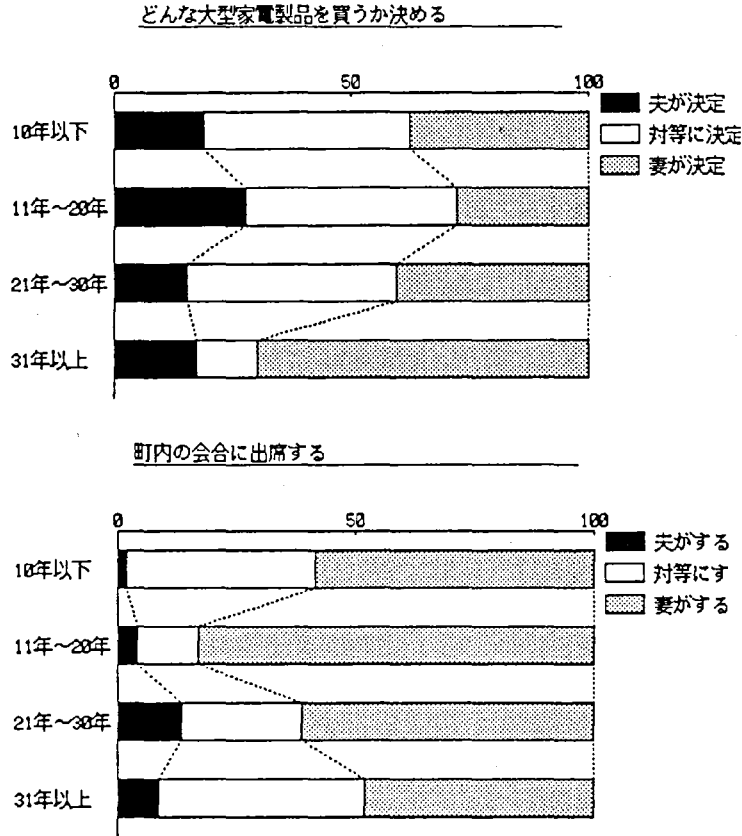


Fig. 6-b. 結婚年数と決定権および役割実行度

た項目が少ないため、ここでは性役割態度と夫妻間の勢力関係との関連については触れることができない。さらに詳細な検討が必要であろう。

⑦勢力類型と役割分担の関係：勢力類型を独立変数、家庭の仕事15項目を従属変数とするクロス分析およびカイ自乗検定を行なった。結果を Table 7. に示す。共通・夫領域に含まれるすべての項目と妻領域の4項目について、一貫した傾向が認められる。すなわち、妻優位型は他の3類型に比べて妻の実行度が大きく、対等な実行や夫の実行が少ないということである。このうち、「7. 家のお客に対応する」「9. 夫の親との対応をする」では、協調型で妻の実行度が最も小さくなっており、後者については対等な実行が最も多くなっている。また、「14. 税金の申告、役所の手続きなどをする」では、夫優位型で夫の実行度が最も大きい。3つの項目についての結果を Fig. 7. に示す。これらの結果から示唆されることは、勢力の強い妻はそうでない妻に比べてより多く家事を行なう傾向がある、ということである。また、夫優位型は夫の実行が、協調型は対等な実行がそれぞれ多くなっている項目も見られ、仕事の種類によっては勢力類型に対応した役割分担が行なわれている可能性も考えられる。

## 考 察

本研究の結果から、結婚後の妻の家庭外就業は妻の決定権を増大させ、逆に役割負担を軽減することが示唆された。また勢力関係の4類型についても、妻の就業によって自律型と妻優位

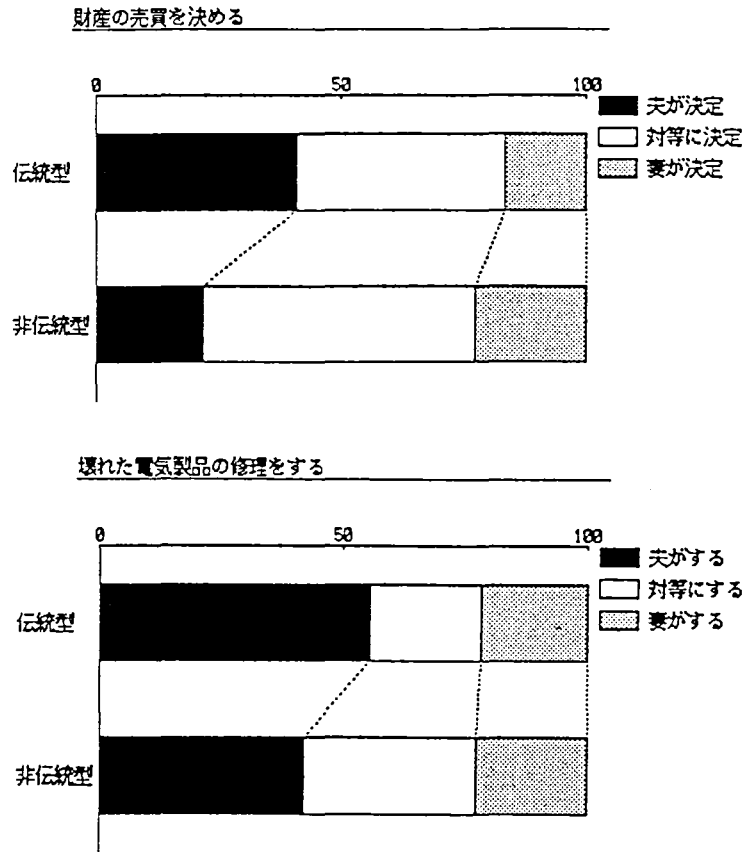


Fig. 6-c. 性役割態度と決定権および役割実行度

Table 7. 勢力類型と役割分担との関連 (カイ自乗検定)

項 目		勢 力 類 型		
		妻がする	対等にする	夫がする
妻 領 域	4. 学校行事・PTAに参加する			
	2. 炊事をする			
	1. 洗濯をする, 洗濯物をたたむ			
	3. 食器を洗う			
	5. 近所の結婚式や葬式の手伝いをする			
	10. 町内の会合に出る			
	7. 家のお客に対応する	B>AC>D	B<C<AD	
	14. 税金の申告, 役所の手続きなどをする	B>ACD	B<CD	B<CD<A
共 通	6. 夫の衣服の買物	B>ACD	B<ACD	B<AD
	8. 部屋の中の家具の位置をかえる	B>ACD	B<ACD	
	9. 夫の親との対応をする	B>AC>D	B<AC<D	
	12. きれいな電球を取り替える	B>ACD	B<CD	B<AD
夫 領 域	11. こわれた電気製品の修理をする	B>ACD	B<CD	B<ACD
	13. 車の運転をする	B>ACD	B<D	B<ACD
	15. 結婚式や葬式の時家族を代表する	B>ACD		B<ACD

「夫がする (-3)」-「妻がする (+3)」

勢力類型 A 夫優位型 B 妻優位型 C 自律型 D 協調型

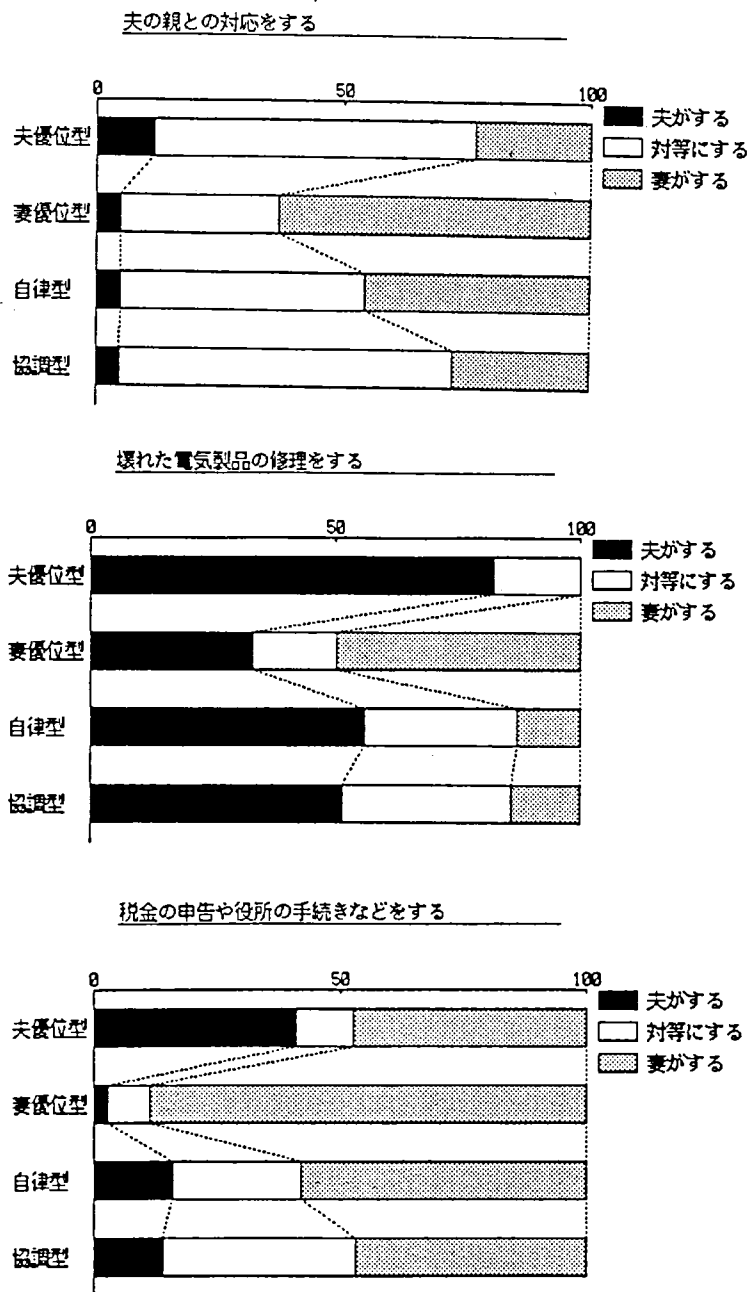


Fig. 7. 勢力類型と役割実行度

型が増加し、協調型と夫優位型が減少した。Wolfe (1959) は、妻が職業を持っている家庭では夫優位型が最も少なく、協調・自律型になりやすいことを示しているが、今回の調査で得られた4類型の割合はそれと一致したものとなっている。今回の調査では就業による個人内変化を取り上げたのであるが、そのためには就業してから現在までの時間経過に伴う他の要因（就業してからの年数や年齢、結婚生活年数、ライフステージの変化など）の影響も当然考慮しなければならない。今後はこれらの要因の影響を明らかにしていく必要がある。本研究は保険

外交員という特定の対象者について行なった。第1報の既婚女性一般と比較したところ、保険外交員の方が特に対応領域で既婚女性一般よりも多く家事を行っていた。この傾向は、家事専業者と比較しても同様であった。これは保険外交員という職業の性質や就業形態による特徴であると思われる。まず考えられるのは、その就業形態に比較的時間に融通がきく自由業の要素があるため、家事に割く時間が家事専業者と変わらないという可能性である。しかし、就業時間の長さによって家事実行度にほとんど差が見られないことを考えると、単に家事に割くことのできる時間の量だけが問題なのではなく、就業に対する態度や職業観などの心理的変数が家事実行度に影響を及ぼしている可能性があると思われる。

就業に関する要因のうち、妻の収入が家計に占める割合は勢力関係と役割分担に大きく影響するようである。妻が家計を担う割合が大きいほど妻の勢力は強くなっており、共通・夫領域の役割実行度が大きくなっていった。これは、いわゆる「費用を負担する人に注文する権利がある」ということを表わしていると思われる。その他の要因では年齢・結婚生活年数で一貫した傾向が見られ、性役割態度の影響については第1報と一貫した知見が得られた。しかし、勢力関係との関連は小さいようである。

勢力類型と役割分担との関係で得られた重要な知見の一つは、妻優位型の妻の家事も自分で行なう傾向である。この結果の解釈として、つぎのようなことが考えられる。一つは、家庭の中で仕事を実際に遂行する者が決定権を握るようになるということである。二つめの解釈は、ここで測定された決定項目の中には、勢力の指標となる「権利」であるというよりも、むしろ義務的な役割に近いものが含まれているのではないかということである。非日常的で家族全員に関わる重大な決定は勢力の指標であると考えられるが、日常的に行なわなければならない小さな決定（慶弔の金額や小遣いの金額、子供のしつけなど）の中には、すでに定型化した役割になっているものもあるであろう。この解釈に従うならば、妻優位型の妻は勢力が強いというよりも、なにかも自分が行なっていて役割負担が大きいという見方もできることになる。この点を明らかにするには、決定項目自体を検討し、家庭の仕事・家庭外の仕事に対する夫妻の価値感および満足度・配偶者に対する役割期待と期待の充足度などを検討する必要があると思われる。

今回の調査では妻による回答しか得られなかったが、妻の就業の影響は、それに対する夫の態度によっても異なると思われる。また、夫妻間の回答にずれが見られることも指摘されている（伊藤，1986）。今後は夫妻間の相互的影響という視点からの分析が必要であろう。

## References

- 東 清和・小倉千加子 1984 性役割の心理. 大日本図書, pp. 143-147.  
 伊藤富美 1986 夫妻間の勢力関係の類型. 風間書房  
 小川一夫 1971 農村地域における夫婦の権威関係の比較研究. 広島大学教育学部紀要第1部, 20, 211-218.  
 カートライト, D. (千輪 浩 監訳) 1962 社会的勢力. 誠信書房, pp. 128-150.  
 黒川正流・坂田桐子 1988 家事分担に関する研究 (1)——ステレオタイプ認知と自分の態度. 広島大学総合科学部紀要Ⅲ, 12, 31-43.  
 労働省婦人局(編) 昭和63年度版婦人労働の実情(婦人労働白書). 大蔵省印刷局  
 Spence, J. T. & Helmreich, R. 1972 "The Attitudes Toward Women Scale: An objective instrument to measure attitudes toward the rights and roles of women in contemporary society" *Journal Supplement Abstract Service Catalog of Selected Documents in Psychology*, 2, 66-67.  
 Wolfe, D. M. 1959 Power and authority in the family. In D. Cartwright (Ed.), *Studies in social power*. Ann Arbor, Michigan: Institute for Social Research, University of Michigan, 99-117.